

2024年2月25日 No. 3708

先週の講壇から

“ 主の思いを知らながら ”

ルカによる福音書 第12章 35節～48節

聖句「主人の思いを知らながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕（しもべ）は、ひどく鞭打たれる。」(12:47)

1. 《仕える管理人》 イエスさまの譬え話には、私たちの中にある、2つの可能性「忠実な僕」と「不忠実な僕」が示されています。譬え話を聞いたペトロは「私に言われているんですか。それとも一般論ですか？」と尋ねました。折角、主が仰せになっているのです。

「他でもない私に」と受け取るべきでしょう。主人の留守を任された管理人の業務は、他の召し使いたちに「時間どおりに食べ物を分配」することでした。こんな事が果たして管理人の仕事でしょうか。

2. 《恵みの管理人》 ところが、前段の譬え話では、真夜中に婚宴から戻って来た主人が僕たちに給仕をするのです。「ペトロの手紙Ⅰ」4章10節には「恵みの管理人」という語が出て来ます。神さまから与えられた賜物（才能や力）を教会の奉仕や献身に奉げるのです。しかし、イエスさまは、もう少し広い意味で言われているように思われます。あなたの与った人生を何に使いますか。どんな風にして人生を送りますかと。「賜物、恵み」とは、私たちの人生そのもの、命そのものなのです。私たちは、神さまから人生をお預かりして、どのように生きるかも含めて、任されているのです。人を殴ったり、自分に酔ったりするためではありません。

《分かち合い》 「食べ物を分配する」のは「分かち合い」です。下男や女中を殴る悪い管理人は、自分独りで食べたり飲んだりしています。赤ん坊の授乳を思い出してください。「時間どおりに食べ物を」与えることは面倒臭いことですが、同時に喜びに満ちた素晴らしい経験です。「自分の人生だから自分の思うように生きるのだ！」と、人生を独占しようとする、却って「私の人生」を失ってしまうのです。物凄いパラドックスです。自らの人生を各々振り返ってみてください。思い浮かぶのは、自分の顔や姿ではありません。共に生きて来た家族や友人たちの姿ではありませんか。生きるとはお互いが自分を分け合うことなのです。私たちは色々な人たちに結ばれて生きている。そこに本当の恵みが生まれるのです。自分独りのために浪費したら、それは「貪り」と言われても仕方ありません。

朝日研一朗牧師